
転生 ～黒き翼～

Bune・Andromalius・Halpas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生 ～黒き翼～

【Nコード】

N4483I

【作者名】

B u n e ・ A n d r o m a l i u s ・ H a l p a s

【あらすじ】

超能力が当たり前となっている世界に住んでいる主人公たちが龍やら魔王やらのいる異世界に召喚されちゃったりする物語
作者の気晴らしで書いているために気まぐれに更新されます。

プロローグ（前書き）

気まぐれで書かせてもらっていますのであまり期待しないでください。

ブローグ

タツ タツ タツ タツ タツ タツ

今回の刺客は強敵だ、上位の魔物を十四匹も召喚している。

しかも城の中でだ。城には俺が結界を張っている。並の術者では有害な術や魔物の召喚など出来ない強さのものだ。

もう十一匹は倒している、残りは三匹だ。

その三匹を今探している、まだ見ていない場所は王女の部屋だけだ。

王女は絶対に守らないとあいつにどやされちまう
そんなことはごめんだ。

部屋に着きドアを開けたら中は荒らされていた、そしてベランダに視線を移した。

そこには二つの影があった

一つは人の形をしてはいるがとても毛深い、輪郭は狼、ウルフマンだ

さらに、毛の色が金色ということはAクラス
もう一つは青いドレスを着た少女である。

俺は一瞬でウルフマンの背後にまわる、むこうが気付いた時には一
刀両断
手に持っていた大太刀を大上段から振り下ろした

しばらく痙攣した後死体は砂となって風に流されていった
俺は少女が無傷なのを確認して安堵した。

「大丈夫か、王女様」

「私は大丈夫です、だけど部屋が荒れてしまいました」
そんな少女の態度を見て俺は

「お前、余裕す……」

「あつ……」

俺の後ろから二つの影が現れた
振り向き様に横一文字に大太刀を振って対処する、両方とも金色の
毛のウルフマンだ。

しかし、上半身だけになったウルフマンの爪がこっちに向かってき
ている
しまったと思った時には体には、そして心臓に爪が刺さっていた
視界が暗くなっていく。

「あつけないな」と思ったがすぐに考えられなくなっていった。

最後に王女の部屋からの悲鳴でこの惨事は幕を閉じた。

No.1 日常（前書き）

プロローグとの関係はだいぶ後になって分かります。

No.1 日常

「おい、綺羅。遊びに行かないか」

終礼が終わり、いざ帰ろうと席から腰を浮かしたと同じにこれである。

拳嵐は放課後が毎日遊び時間なのか、そうでなくてもそう思っしまづぐらいのしつこさだ。が、今日はこの後用事もない暇な日なので同行することにしよう。

「ああ、別にいいが変なところに行くことは駄目だぞ」

「大丈夫、今日はな。また今度連れて行ってやるよ、おまえの言う変なところに」

「連れて行くこうとするな。連れて行くなら賢志を連れて行け」

「ああ、そっちのほうが目面白そうだな。明日連行してやろうか」

「本人の意見を聞かずにはいはい連行しようとするな」

身の危険を感じ取ったのか賢志は話に割って入ってきた、が……。

「なんだ賢志、俺はちっちゃなお前を男にしてやろうと……」

「ちっちゃい言うな!!」

「落ち着くんだ賢志、そのくらいでキレるようならまだ子供だぞ」

「子供言うな……!!」

賢志は背のことについてからかうといい反応を返してくるから面白い。

毎日からかっているのに飽きが来ない、そんな変なやつだ。

「なに人を変人扱いしているんだ、そう言うお前のほうが変人じゃ

ないか」

「なにを言っているんだ、俺はいたって普通だぞ」

「どうだかな〜w」

「なに笑ってんだよ（ペチッ）だいたい地の文読むなんてなに者だ」

「頭はたくさんじゃねえ、お前が小声で独白してただけだぞ」

「そうやぞ綺羅、そしてお前はけっこう普通やないぞ」

「何、そんなバカな」

「気付いていなかったのか」

「ある意味天才的やな」

「俺は普通になっているはずだぞ」

「普通の人が偏差値85はおかしすぎるやろうが」

「運動神経抜群、様々な格闘術を習得しているなんてどれだけ超人的なんですか」

拳嵐と賢志は信じられないような顔をして話しかけてくる。どうしてそんな顔をしているのか、俺には全然分らない。

「とりあえず、賢志も一緒に遊びにいくか？」

「ああ、そうする」

賢志も一緒に行く事になった。そして教室を出ようと扉に向かおうとした矢先。

「ちょっと待ちなさい、あなたたち!!」

No.1 日常（後書き）

世界観の説明やらキャラ紹介はある程度進んだらします。

No.2 日常2（前書き）

学テス塾テス学テス塾テス受験の五連コンボということで長期にわたって作品の執筆を休むことをお知らせします。また他の作品も同様です。

No.2 日常2

声が聞こえた方に振り向く。

そこには、ボーイッシュな髪型にやや紺色の混じった黒色の髪の毛、引き締まった身体に人懐っこい笑みを浮かべる可愛らしい顔。

「どうしたんだ蓮華、変に大きな声を出すなよ」

「変にとはなによ、それより私も一緒にいかせてもらうからね」

「ストーキング？」

「違うわよ、何でそんな話になるのよ」

「だってなあ、いつもいつも事あることについて来るんだよなあ」

「そやそや、たしかこの前は綺羅のところの夕飯の買出しやったかな」

「うっ、それはその、あのその……………」

氣勢をそがれて言葉につまっているみたいだ。

こういった態度がちよつと可愛いのだが、一度同行を拒否してしまつとドラマの刑事さん顔負けの尾行でついてくるのである。

いくらまいてもいつのまにかこちらの5メートル後ろにいるつえに、鬱々とした顔で口を小さく動かしていたりする。

そして、独白の内容が「何で一緒にいこうとしないのよ」である。

そういった事情もあつて……

「まあ別についてきてもいいよ。なあ、拳嵐」

「お、おうそうやな」

結局ついてくることを承諾することになるのである。

「やったーオーケーだつてさ二人とも」

「そーみたいね、それにしてもよくやるわね」
「そーなのですよ、はうう」

綺羅たちのうしろからお馴染みの声がした

「何や、お前たちも来るのか」
「黙れ、関西人がぶれ」

拳嵐の愚痴に鋭い罵倒を言う真樹。

「また大所帯になってきたな。とりあえずチビは帰れ」
「はうっ、そんなひどいことを。人のこと言えないくせに」

賢志の八つ当たりになさな声で反論する智美。

「漫才か？」
「どこが？」
「夫婦？」
「余計にちがうわ（ます・です）」

こいつらには他の生徒の迷惑になっているとは思っていないらしい。

No.3 日常3

他の生徒から注意を受けてようやく彼等はその場を去ることにした。そうして、下校するために下駄箱へ行き、靴を履き替え。テンションが上がってきた綺羅達が校門を出ようと足を運び始めた矢先……。

「お兄ちゃああああああん」

ドン。綺羅は背中に大きな衝撃を受けた。

そこには、それはそれは可愛い笑みを浮かべた少女が綺羅の腰に手を回しガッチリとホールドしていた。

「か、奏。苦しい」

「お兄ちゃんは、これから、みんなと一緒に、どこに行くつもりなのかな」

奏はどうやらおいてけぼりを食らってしまったと勘違いしてしまったらしい。

「か～な～で～ちゃん、いつまで綺羅に引っ付いているつもりなのかな」

「わ、わ、いきなりなにするんですか美川さん」

「それはこっちの科白よ、なんでいきなり綺羅に抱きつくのよ」

「愛情表現なのさ」

ずいぶん激しい愛情表現だな、とか思いつつ腰に回った手を解除しようと奮闘する俺。

「な、あ、愛情表現ですってー!!」

はいそこ、勝手に勘違いしない。

「おまえら、人前でよくやるな」 「万年発情期なんじゃないんですか」

トリアエズコイツラヲケセバイイノカナ？

「相変わらずなかのいい兄妹だね」 「はう、一線は越えてはいけませんよ」

さりげなく思わせぶりなことを言うこいつ等も殺っちゃった方がいいかな。

「お、お兄ちゃん、顔がこわいんだよ」

「大丈夫だ奏、この馬鹿どもに永久の沈黙を強制させるだけさ。なに、そんなに時間はとらない、ただ一瞬ですべて終わるさ」

「ちよつ、本気じゃないでしょうね綺羅？」

「はははは、ジョークに聞こえるかい？」

「やばい、からかいすぎたせいで綺羅がきれかけとる」

「やはりそういうことでしたか」

「「「「敬語になつてるー!!」」」」

さて、どうやって料理してあげましょうか。最低でも二時間はしたほうがいいでしょうか、それとも……………。

「お兄ちゃん、皆反省してるみたいだしもう許してあげたら？」

「奏がそう言うのなら。まあ、今のところは許しておくか」

「えへへへ、ありがとうお兄ちゃん!」

嵐はどっちら過ぎ去ったらしい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4483i/>

転生 ～黒き翼～

2010年10月11日19時19分発行